

急に止んだりすると、びっくりかえってしまふんですね。上手な人はそんなことはないんですが。風が止むと、帆がべたんと縮まってしまつて、今まで風下の方へぐんぐん引いていた力がなくなつてしまふもんで、今度、今度は網を引いている方の力が強くなつて、バランスを失ない転覆してしまふんです。だからうまい人は風が止むと、とっさに帆を下ろす。手練の早わざというわけです。しかし下手な人はびっくりかえつて、船が横だおしになつて、水がいっぱいに入つてしまふんです。でも船は木だし機械も積んでいないから沈みはしないんです。そうすると一生懸命水を汲み出してもとにもとずんですが、帆は水びたしになつて、重たくて上らないんですね。帆は「せみ」で上げるんですが、「せみ」というのは滑車です。それに、「こな」といって綱が二重についておつて、それに帆が大きいために竹がついている。だから一旦ぬれたらとても上らないんです。

こんをわけて一度転覆したら、家に帰つてきて、翌日、日が出ると帆を「おだ場」という乾し場で乾かして、昼過ぎ取り込んで、また夕方出かけるんです。

昔は、量りじゃなくて、升計算なんです。一升ますで何はいとれた、というのが魚獲量の計算の仕方だっ

たんですね。私の最高の記録は、ますで二百でした。普通は五、六十ですね。五十はいというところの計算にして百キロ位でしょう。だから最高記録の時は一網で四百キロもとつたというわけですよ。その時は船が沈みそうでした。何しろ今と違つてその頃の船は小さいでしょう。だから網を上げてワカサギを積むと、舟いっぱいになつてしまつて、うずまつてしまふんです。浜まで帰ってくるのは大変でしたよ。いやあ、その時は痛快でしたよ。

風がいいと、あつちの村からこつちの村からいっせいに帆曳の船が出るんです。三百以上も出ることはざらでした。出島は出島の前に、志戸崎は志戸崎の沖に田伏、沖宿、阿見と夫々の領分へ出て帆を上げるわけです。昔は手漕ぎでしたから、そんなに遠くまで出られない。だから遠くから見ても、あそこはどここの村の船だとよくわかるんです。湖面に白いかたまりが、あつちにある、こつちにある、島みたいに寄り集まつていたんですね。

帆曳の時期は、夏場から十二月いっばいでした。夏場は夜やって、十一月に入ると昼間やりました。寒いし、夜は危険でしたからね。船が転覆すると、死んでしまふかもしれないので。そうするとまた、夏とちが